

1. 今回の講義の流れ(P131-132)

- ・ テルトゥリアヌスが洗礼、その準備や業において、魂の清めと真理への到達の関係をどのように定めているかを探求してみたい(P131, L1-2)。→真理の歴史、客観性の関係や構造の視点や、志向性の構造の視点からなされるものではないような心理の歴史を素描すること、そのいくつかの輪郭を描くことに繋がるから。
 - ・主体性の業や主体の主体自身との関係
 - ・主体の主体に対する自己認識とは異なる訓練
 - ・主体の主体による錬成
 - ・主体の主体による変容
 - ・真理と霊性と呼ばれるものとの関係
 - ・真理の業と修練=修徳
 - ・真理の業と強い意味での経験
 - ・主体になんらかの格を与えるとともに、自己と世界について照明を与え、同時に主体を変容させるような経験との関係のようなものを出発点とする真理の歴史

2. テルトゥリアヌスの問題(P132)

- ・ テルトゥリアヌスが洗礼に関して清めと真理への到達の間に打ち立てた関係・・・2世紀の使徒教父や護教家のものとは異なる。
- ・ テルトゥリアヌスがもたらした変化・・・清めと真理の関係の組成にいくつかの変化→テルトゥリアヌス以後、あるいはテルトゥリアヌスの著作を通して、ひとつの現象が観察され、この現象が同時代の他の著作家においてもこだまや応答を引き起こしているように思われます(P132, L7-10)。
 - ◇ 洗礼(洗礼の準備と洗礼のプロセス)
魂は、洗礼の準備や洗礼の儀式において、たしかに知の主体や知識の主体であり続けつつも、ある意味では知識の対象として構成するようなプロセスにも置かれるようになる。
 - ◇ 試練
清めと真理への到達の関係は、完全には教えの形をとらない、あるいは支配的なものとしてさえ教えの形をとらず、むしろ試練という形をとる。
↓このことをこれから解明していく。

3. 洗礼準備の問題(P132-151)

- ・ 使徒教父や護教家の時代・・・洗礼準備の時期=教えの時期
 - 洗礼志願者を知識の主体とする時期
 - (1)教義の真理・キリスト教的な生活規則を教える
 - (2)信仰告白
 - によって、志願者=真理そのものになるという構図。
- ・ テルトゥリアヌスの『悔い改めについて』・・・強調する部分が異なっている！
「私たちが洗礼の水につかるのは、清められるためではなく、清められたからである」
→ここにはあきらかに重要な意義、効果、変化がある。

(1)時間の流れに関する顕著で明白で目に見える移動

清めは洗礼の業そのものから、それに先立つ手続きへ、先例に先立つ準備の時期全体へと移行する
あるいは、移行すべきだとされているように見える。

(2)清めの担い手の移動

清めの行為者が神から人間へと移動している。

(3)浄と不浄のゲーム→道德のゲームへの移動(変化)

洗礼における照明が生じるはずの瞬間以前に清めがなされているかどうか問われている＝清めこそが真理へと導いてくれるはずだという考えへの変化。

↓これらの変化を詳しくみていく。

- ・ 第一の指摘:テルトゥリアヌスは、洗礼の水の清め効果そのものを否定しているわけではない。
 - ◇ そもそも、テルトゥリアヌスの『洗礼について』という論考は、洗礼の効力を否定する運動に抗うためのものだった。
 - ◇ 洗礼の効力を否定する議論(グノーシス派の)
 - (1)魂はそれ自体では清められる必要はない→だから、自身を洗礼で清める必要はない。
物質と悪の世界に清らかな魂が閉じ込められているのだから、むしろ解放しなければならないのでは?と主張。
 - (2)物質的なものとはまさに悪と不浄→水という物質的なものを使って、どうして純粋なものを清められるのか?
だから、洗礼の行為そのものがスキャンダルをもたらず類のものだと主張。
ニコライ派の一派の長だった女性「水を少々浴びたところで、どうして死を清められるのか」
↓それに対するテルトゥリアヌスの反論。
 - ◇ 聖書における水の霊的な価値
 - (1)世界創造以前に、神の霊は水の上に浮かんでいた
 - (2)神が人間を創造したとき、粘土と土しかなければ、人間の身体をこんなにも複雑で完璧な形で成形できなかったはずだ。神から人間へ類似のような何かが移行するのは、水を通してだ。
 - (3)大洪水の際に、すべての罪人を大地から清めたのも水だ
→テルトゥリアヌスは、聖書全体を通じて、水は神が世界や物質や被造物との関係を持つための形式だったと主張。
→洗礼は、神が被造物に対して行う働きかけの1つの形式という解釈。
- ・ 第二の指摘:テルトゥリアヌスは、志願者が洗礼の効果に関して持つ信仰について、目に見える形で現す態度に、道徳的・神学的な理由から非難を行っている。
 - ◇ テルトゥリアヌスが非難していた態度
 - (1)洗礼するとき、悔い改める必要はないのでは?と言い張る態度(とつとと、洗礼)
洗礼は、自分たちが犯した過ちをすべて清めてくれる→過ちを申し訳なく思い、遺恨を感じる必要などないのでは。できるだけ早く洗礼してくれ。
 - (2)飽きるほど罪を犯してから洗礼すればいいやとする態度(ギリギリまで遅らせて洗礼)
洗礼されると自分が犯した罪を決定的に禁じられてしまう→だったら、その前にできる限りの罪を犯してしまおう。
↓これらの態度を受けて、テルトゥリアヌスは洗礼の準備がいかなるものかを再考することに。
- ・ 2つの態度に対するテルトゥリアヌスの攻撃

(1)洗礼は人間に課せられるのと同様に神にも課せられるという考え方が、2つの態度の背後にあるのでは？

- ✓ 人間:洗礼の時を選べるし、それを準備する必要はない。
- ✓ 神:人がひとたび儀式を受けた瞬間に、赦しをあたえざるを得ない。
→テルトゥリアヌスの指摘:神の自由は隷属に変えられてしまう。人は神を隷属させる=神は人間の意思に隷属させられる。これは、誤謬だ！

(2)どちらも、罪という考え方を誤って解釈しているのでは？

- ✓ 汚れや穢れとしての罪
- ✓ 墮落としての罪
→それ以上のもの(=原罪)が、人間にはある。
人間の魂をその誕生のときからしるし付けているもの
根本的に本性の倒錯、人間本性の倒錯。
→清めとは、たんなる光の効果ではなく、私たちの本性を根底から取り上げ直すことが必要なものなのだ。

↓この主張をすると、悪は別の物質なのか、根本的に異なった本性なのか、という問題が生じる。

・ 悪についてのテルトゥリアヌスの解釈:絶対的悪を想定する二元論的議論と、罪を穢れや忘却と捉えるプラトン流の考え、その中間的な解釈を取る。

◇ (1)生きた存在の成長という比喩を用いて説明を試みる。

成長したときにすることを生まれたときにできないのは事実。

これは、1つの同じ本性の内部で、一方から他方へと移行することを示している。

↓

洗礼の準備とは、動物たちが訓練や失敗や間違いや負傷を何度も経て、したいことができるようになり、その真の本性に達して成体になるという変容と同じような変容なのだ(P141, L4-5)。

↓フーコーの指摘:同時期にクレメンスが展開していた比喩と対立している点が興味深い

※クレメンスの比喩:

「キリスト教徒になりたければ、神の前で幼児になり、キリストの前で幼児にならないといけない」

→洗礼を受ける前に、そしてキリスト教徒になる前ですら、キリスト教徒は自分を神の子とみなさなければならぬという考え

◇ (2)罪とは、人間の魂の中に入り込んだサタンによるものだとする説明

サタン・・・すべての人間の魂の中に居座り、魂の内部に王国を打ち立てる存在。

私たちの魂の1つ1つ・・・いわば小さな教会

グノーシス派などの墮落のイメージ:魂自身の本性に従うならば神の下や天上の世界に居所と住処を持っているのに、墜ちて物質の中にまみれてしまった。

=墮落とは、魂が不純な世界に置かれているということ

テルトゥリアヌスの墮落のイメージ・・・魂の中に悪の要素があり、悪魔的なものがある。

=ゆえに、洗礼の役割は魂の中からサタンという敵対的で異質で外的な要素を追い出すことになる。

↓この考えこそ、キリスト教史上重大な考え方。

これまでの考え:教えによる入信→個人は真理に近づき、ついに照明される時が来る。

テルトゥリアヌスの考え:キリスト教徒であればあるほど、悪魔が荒れ狂う。

真理や解放に近づけば近づくほど、敵は悪意ある者、暴力的で、激昂し、危険な者になる。

= 洗礼の時は、危険な時、危機の時、闘争と戦いの時

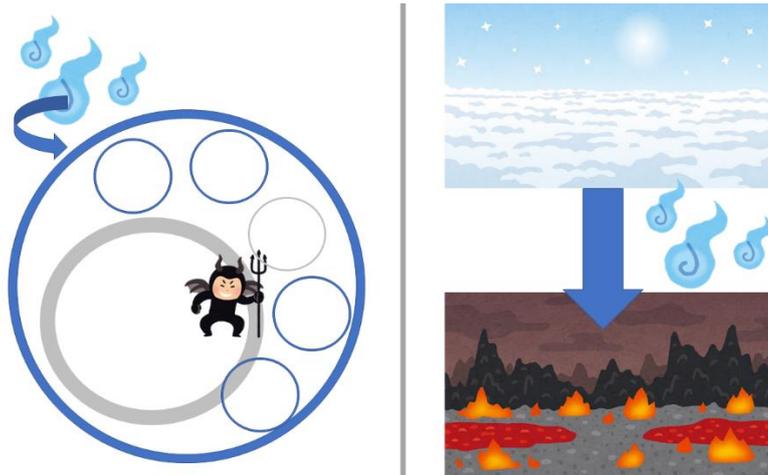


図 1. 墮落のイメージの比較(左がテルトゥリアヌス、右がグノーシス派)

- ・ テルトゥリアヌスが洗礼準備に付与した概念

(1) 神の鷹揚さ = リベラリタース (liberalities)

神は、魂の清めを保証する儀式の中でさえ、なおも自由でなければならない。

赦しを与える寛大さと赦しを与える自由という 2 つの意味でのリベラリタースが、神において保持される。

(2) 人間の畏れ = メトゥス (metus)

キリスト教徒は、洗礼を準備する間、そしてひとたび洗礼された時、畏れをけっして手放してはならない。つねに危険のうちにあることを知らねばならない。

つねに不安でなくてはならない。

→ 主体が自分自身に対して持つべき関係の根本的な特徴としてテルトゥリアヌスが据え付けたのも、この不安、畏れ、メトゥス。

↓ このことから・・・。

- ・ (1) 真理への到達

真理が真であることを、一瞬たりとも疑えないこと、教えられることは真であり、真理は聖書に開示されている。

→ 不安なく、絶対的確信。

主体が自分自身に対して持つべき関係、魂が自分自身に対して持つべき関係に関しては、不安は拭い去られるべきではない。

→ 自分が完全に純粋であるなどけっして確信してはならず、救われるだろうと確信してもならない。

- ・ テルトゥリアヌスの「洗礼の準備はメトゥスとペリクリ、畏れと危険の時であるべきだ」

↓

歴史上初めて、畏れ-この意味での畏れ、つまり自分自身についての畏れ、自分の存在が何であるかについての畏れ、[何が起きるか]についての畏れ-が、つまり運命に対する畏れでも、ましてや神話に対する畏れでもない、このような畏れが、二世紀と三世紀の境目からキリスト教に根付き、主体性と呼びうるもの、すなわち自己との関係、自己の自己に対する訓練、そして個人が自分自身の心の奥底に発見できる真理などの歴史において、決定的な重要性を持つことになったと思われます (P145-146)。

- ・ テルトゥリアヌス「つまり練磨すべきである、労苦を引き受けるべきである」
労苦…悔い改めの訓練=教え
- ・ 「悔い改めの訓練=教え」とは
悔い改め…パエニテンティアとは、メタノイアの古典的なラテン語訳
メタノイア…魂の変化、魂がそれまで見ていたものから目をそらす運動=魂を照らす真なるもののほうに向かう運動
テルトゥリアヌスにおけるメタノイアの翻訳…まったく異なった意味
↓なぜなら…。
- ・ ヨハネの洗礼問題
キリスト以前に洗礼していたヨハネをどう考えればいいのか？
ヨハネの洗礼がキリスト教徒を作り出し、それによって救済をもたらしていたと考え、キリストは無用だということになる。
↓テルトゥリアヌスの答え
洗礼には、2つある。
(1)ヨハネの洗礼…悔い改めの洗礼
洗礼者は人間であり、人間たちを洗礼したが、この洗礼には天上的なものは何もない。
つまり、聖書による照明も、神による罪の釈免もない。
ここにあったのは、人間が自分の罪を後悔すること、かつての罪に対する悔い、そこからの離脱、再び罪を犯すまいという決心。
これはいわば布石。＜救い主＞が到来したときにこそ、救済そのものに先立つこの悔い改めの営みが、罪の実際の赦免としての報いを受けることができる。
→キリストがヨハネから洗礼を受けるのは、悔い改めをする必要があったからではなく、洗礼を受ける前に悔い改めなければならないことを示すためである。
(2)照明としての洗礼…悔い改め後に行われる洗礼
自己の自己に対する訓練は、永遠の真理を開いてくれる照明において知識の主体となる運動の予備段階。
メタノイアが指し示す運動は、離脱すると同時に何かに向かう運動であり、闇から離脱すると同時に照明されること。
パエニテンティアとは、メタノイアの運動の統一からの一種の分離。

4. 洗礼に先立つ修練(P151)

- ・ テルトゥリアヌスの指示①:洗礼がある程度の修練や訓練の後、悔い改めの後にのみ与えられるとすれば、言うまでもなく、洗礼をどんな人にでも拙速に与えてはいけないことを意味する。
- ・ テルトゥリアヌスの指示②:罪人は赦される前にみずからの状態を嘆くべきである。
↓清めること、洗い流すこと以外の意義がある。
- ・ 個人に対して悪と戦う能力、適性、力を与え、そうするための要領をつかませてくれるという機能
→洗礼の時にはサタンが攻撃を倍加させているから。
→洗礼準備は厳密な意味での修練、すなわち鍛錬。
物理的鍛錬であり、身体的鍛錬であり、霊的鍛錬。
- ・ 洗礼準備の時は、ディスクプリーナ・パエニテンティア工、すなわち悔い改めの訓練=学び
- ・ **キリスト教徒の人生はすべて悔い改め**
→これこそが、テルトゥリアヌスが洗礼準備に与える新たな解釈において重要なこと

- ・ 洗礼時の等価関係…悔い改めとは洗礼と罪の赦免のために払う値段
主:永遠の生命という報いを贈ろうと考えるとき、悔い改めの貨幣が良質なもののか、不正がないか、詐欺ではないのかを吟味する。
→悔い改めの試練ないし、悔い改めの真理
→悔い改めとは神の眼前で、罪人そのひとの真理、思いの真摯さ、悔いの真正さ、もう二度としないという言葉の現実性などを現出させなければならないという考え方。

5. 悔い改めの機能(PP152)

- ・ メタノイア…魂が真理の方を向き、自分自身の真理を発見するという意味で、統一的な運動。
- ・ テルトゥリアヌスの真理…2 つある
(1)洗礼を準備しながら知ることを学ぶ真理、洗礼そのものにおいて実際に照明してくれる真理
(2)運動そのものの真理、悪から身を引き離し、悪と戦い、それに打ち勝つべく訓練し、善に向かって運動する魂そのものの真理
→神という真理への自己自身の運動であり、魂の真理、神の眼前における自己の真理
=悔い改めの二重の機能

6. 補足(P152-153)

- ・ 教えの構造…テルトゥリアヌスの著作においては、教えの構造と試練の構造とでも呼びうるものが切り離される地点がある。
- ・ 使徒教父や護教論者の著作…洗礼準備は教えの構造が支配的であるような入信形態に似ていた。
→教えによって進歩し、すべての真理を知り、それを口に出して言うことができるようにならなければならない。
- ・ テルトゥリアヌス…洗礼準備は魂による真理獲得の構造と、魂がその真理において現出化する構造の交差として現れる。
修練と照明が分かれつつあり、告白が信仰から分かれることになる。

7. H松の疑問

- ・ メタノイアが指し示す運動について。「要するに、修練の 때가 照明の時から距離を取りつつあるのです」とフォーコーはまとめている(P148, L15)が、修練=照明ではなく、いつ救済されるか(照明の 때가 来るか)分からない中で、ひたすら修練を続けることになったという理解で間違いはないだろうか。